

詩時評

第29回

さみしくなったら
詩の庭へ

松本衆司

林嗣夫著『詩を巡るノート』（「新」詩論・エッセイ文庫／土曜美術社）はしみじみと詩的人生を味わうことのできるエッセイ集である。その中の一篇、「石川逸子と『兆』という随想を読んでいて石川さんの『詩の庭』という詩に出合った。「さみしくなったら／ちよっと寄ってみませんか／詩の庭へ／はしつこに置いてある／古びた木の椅子に腰かけ／束の間 うたた寝するのでもいいし／小さな池で水浴びする／スズメたちのさわぎを／ながめるのもいいでしょう／この庭をだれがしつらえたかって／はるか昔から／不器用でさみしがりのやの詩人たちが／花を植えたり／夢と書いた風をちよこんと飛ばしたり／魂だけ半獄から飛んできて 作ったのでしょうか、大切なものを取り戻せるようななんとも心地

よい情景が浮かぶ。

富上芳秀著『ジジイの覗き眼鏡』（詩遊叢書35 詩遊社）を読む。詩と詩論とエッセイを二四一頁に見事に収めた、彼十七冊目の著作である。「富上芳秀」愛好家にとってはたまらない一冊であろう。詩「花冷え」を引く。

体調が悪く沈んだ気分で籠っているうちに櫻も散り初めている大川の淵で、今日も私はひとりである。あの医者はずかしくて親知らずを抜いた後はぽっかりと暗い穴があいて腐った肉汁がにじみ出てくる。私を愛してくれた父も、私を愛してくれた母も

今はいない。道院は暗く静まり返っている。古書店は消えて、肉を売る見知らぬ 飲食店が並んでいる。整形した異国の女たちのようにのっぺりした同じ顔の人影が無表情に歩いてくる。ウインドウに映る私の顔は昨日よりまた老いている。明るく明かりのともった道院で修業しようと思つたが、あまりにもレベルが低い。私は黙って去った。最後に残ったわずかな髪を剃ることにした。もしかししたら、明日は、新しくなれるかもしれない。

この著作は見事なほどこを切り取つても「富上芳秀」があふれてくる。四十年を超え

る詩友なので私情が入るが、これほど詩文学を愛し、誠実にものを書き続けてきた人を私は知らない。詩的想像は限りなく、その創作には抒情が漂う。妥協のない文学的批評眼もどこか優しい。しかも彼は少林寺拳法の達人でもある。右の作品はその「富上芳秀」のひとつの結実である。

苗村吉昭詩集『神さまのノート』（土曜美術社）を読む。「ふるしきの中身」を引く。

わたしのむすめがちいさいときに／ふたりで電車にのった日がある／四人がけの席に／年老いた女の人がさきに一人ですわつていた／むすめは座席におしりをおろすと／カバンからふるしき包みをとりました／それをふともものうえでひろげて中身を点検しはじめた／ちいさな双眼鏡／プリキユアの変身グッズ／お絵かき帳／そんなものひとつひとつ手にとって点検すると／むすめは安心してふるしきを結びなおし／床につかない足をブラブラさせながら窓外をみている／そんな姿を年老いた女の人が微笑ましく見つめていた／そう／あの日はわたししあわせな日／ちいさいむすめと二人／わたしはどこにむかっていたのだろう／か／ふるしきいっばいのしあわせと／ふるしきいっばいの可能性をもって／わたした

ちはどこにむかつていたのだろうか／微笑
む神さまの眼のなかで。

コロナパンデミックや戦争、異常気象、少
子高齢化、物価高と、世の中がおかしい。一
体この国の未来はどうなるのか。大人たちは
どうしたいのか。詩人は五十代になり、次の
時代への責任を考える。少女の「ふろしきい
っぱいのしあわせ」が壊されないために。

マコ・ニシタニ詩集『LAST DAY
SUMMER』（茜さす紫の傘）を読む。「日
曜日のきみに」を引く。

青い空に雲がゆつくりと流れてゆく／ただ
それだけのことなのに／これを美しいと思
うように／人の心が作られているのが不思
議だ／人が空を見上げるのって／どうい
うときなんだろう／太古の昔から／人は空
を見上げてきたのだろうけれど／「山の
あなたの空遠く／辛い住むと人の言う」／
／二、三十代のころ／ブッセの詩片を思い
浮かべながら／住宅街の向こうに広がる空
を／小さなベランダからよく眺めた／ワ
ンルームマンションの面した細い道路に／
子供の声が響いている日もあって／／な
んで急に／こんなことを思い出したのか
／穏やかな一瞬一瞬が／あのころにも存在し

ていたと／／今わたしは昔と別の地において
／また空を眺めている／雲がゆつくりと形
を変えてゆく／その妖艶さに／ただ心を奪
われている

一人の女性のさり気ない心模様というか、
気儘な空想とおしゃべり、そんなタツチの詩
集であった。その心地よい日常性に魅かれる
詩はどこからでも思いを提示できるのだ。

藤山増昭詩集『岸辺のバンセ』（編集工房
ノア）を読む。「呪文」を引く。

「ガンブリア、オールドビス、デボン、パル
ム、ジュラ……」／古世代の名をこう呟く
のは／遣る方なき倦怠を曳きずった／眠れ
ぬ夜半の　ひとつの呪文のはずが……／ふ
いに目交を掠める黒影／／まっ青な大海原
のはるか上空を／飛んでゆく　白い大鳥
の　その影／膨らむ翼が更に風を留め
「時」に煽られ／高く低く飛翔し　億年の
時空を越える　とり／／眼下に緑の鳥々の
連らなりをみて／また「デボン、パルム……
」と数えてみる／何かしら　眠らねばな
らぬ夜／／だが　音のない白波が鳥の形を
明晰にする／あの岩場あたりから　体の中
に海を抱きつつ／這い上がってきたものが
いて／あれは陸の凹凸と海との温度差に跪

き／光や風にも戸惑い　それでも体を引き
摺り／海から離れていった　始まりの時の
こと／幾万年の全身を　大地へ擦り刻んだ
／勇ましくいとおしき大先祖たちのこと
／眠りへ落ちる眩暈螺旋に傾く直前に／目覚
めてしまった夜更け／／ひとしきり　また
眩いてみても／計らずも記憶されていた無
辺の迷宮へ／ただ一人　置かれたと知れば
／眠りの襞の内へは遂に入れず……／／今
や眠りの岸辺へ寄る術は　かの羊たちを
／昔ながらに数えてみるしかない／／　とろ
んとした昼間　石のように動かず／　ゆっ
たりと草を食むあのものたちを／　一頭ず
つ　ひとおつ　ふたあつ……

海の中で生まれた細胞が進化をし、三十七
億年の悠久の時を経て……、とそのような科
学者の視点を持つ詩人である。故に一日の意
識の営みを終えた間隙の時間にもたらされた
想像の世界は一層いのちの尊さをたたえる。

重光はるみ詩集（新・日本現代詩文庫16
2土曜美術社）を読む。詩集『きつといつか』
より「森の奥に」を引く。

一回りしただけなのに／自分のいる場所が
分からなくなる／先のとがった高い木を目
印にしていたのに／似たような木はいくら

もあって／道はどれも同じよう／／どこへ向かえばいいのだろう／森の木はみなこちらだと誘うし／一本の樅の木を目指していくと／もうどの木も知らん顔／いぶしこぶしのスタジイの根元で／足は止まってしまった／／洞にもたれて腰を下ろすと／木はずかしく問う／何を探しているのか／何のために探すのか／／わたしの木を知りませんか／森の奥にけなげに立って／わたしを待っているのです／／だがスタジイは首を振るだけで／答えてはくれない／／ざわめきの消えた森／奥へと続く野茨や笹のかぶさったほそい山道を／かきわけながら歩く

*スタジイ＝椎の一変種。

誰しもが、生きてきたその道程に「森の奥にけなげに立って／わたしを待っているのです」、そんなことがあるような…。詩の原点を見るような、見事な詩だ。

田中裕子詩集『五月の展望台から』（土曜美術社）を読む。「同窓会」を引く。

自動詞は受け身の形にはならない／と先生は言った／たとえば出る／見分け方は簡単で／他動詞は目的語をとるが自動詞はとらない／働きかける相手はいらないということだ／だから先生／私があなたに死ぬ

ことも／あなたが私を死ぬこともないのですね／／どんなに迂回しても抗っても／出るの主語には辿り着く／選ばれたように細っていき或いは唐突に／松林の中の高校で／すべては紙の上の／予習だったろうか／／浜の形も鉄道の駅も変わって／窓の外の松籟はもう／聞こえない／／けれど先生 生きていれば／出るはいきなり変化して／受け身になることがあるのです／／私は あのひとに 死なれた／／（あのひと）が存在を増し始める形／撫でもさすつても変えられない形／消しゴムで消そうとして破れた答案の形／／三十年ぶりに懐かしい人たちに会いに行つて／七年越しの訃報を聞く

私たちは四苦八苦しながら生老病死の世界を死に向かつて生きている。そして、その一瞬やひとときの思いや憂愁を心に満たしている。そこから詩が雫のように零れ落ちる。この詩はその零れ落ちた雫の見事な結晶である。

奥田和子詩集『老いの検索』（編集工房ノア）を読む。「二体」「老い」の二篇を引く。

車いすが一台／診察室からでできた／背の低い奥さんが／押している／うつむく夫に／セーターのボタンを／ひとつひとつか

け／背伸びしてマフラーを／首に巻いてあげた／やっと 終わった／／灰色に溶けあう／ふり絞った／一体のオブジェ

（「二体」）

やれ シミがどうのこうの／やれ 白髪がどうのこうの／やれ 歯を白くするには／やれ ほうれい線がどうした／やれ 下腹の脂肪は／やれ ○と△は□で×／やれ：は／やれこんなこと 大げさに／あげつらつて いうな／歯は 白くたつて 黒くたつて／遺骨になったら おなじじやわい／老いた人には耳障りな話ばかり／／みんな老いたら／そうなるのだ（「老い」）

さすがに詩歴の豊かな詩人の詩業で、詩集の何れの作品も味わいがある。世の中がどれほど便利になり、情報があふれようが、いのちある人としての営みは普遍であり、そこには変わらない人間の風景がある。

まるらおこ詩集『予鈴』（人間社×草原詩社）を読む。「雨天の森」を引く。

万の線が／土に降りそそぐ／／風景に流れでるからだ／いま とても／水溶性が高くなつていて／ほんとうに いま／雨に当たった指先から／溶け出してゆく／／いつかきつと／見つけて／葉の下 苔の縁／わた

しの手がかり

人間はいろいろなものが混じり合うとても厄介で繊細な生きものである。そのひとりの人間としての哀しみを背負い、社会で生きることは実はとても困難なこと。詩はそのような理屈を超えて美しい。

前田珈乱「氷点より深く」(人間社×草原詩社)を読む。「恋心」を引く。

呼気澄みて、季節は冬、／私の呪文は大気を貫く。／吸気冷えて、雪の香り、／華やぐ視界に恋の予感

冬を愛する詩人の思いが綴られている。この詩もまたそうだ。凜とした空気の中、春の予感がさりげなく感じられて好ましい。

後藤光治詩集「記憶の杜」(土曜美術社)を読む。「カキ氷」を引く。

夏祭りの夜／カキ氷屋に入った／母は嬉しそうに／僕の手を引いて 入った／僕は気後れして／こんなところに入っていないのかと思った／学校に納めなければならぬ／お金のことを／いつも／言いつせずにいたから／シャキシャキした水を／匙で掬

って食べた／母はイチゴのカキ氷／僕はメロンのカキ氷を／零した水が テーブルの上で溶けた／母は肘をつき／笑って僕を見ていた／最後に残った／氷水を飲んだ／母は ルビーのような氷水を／僕は サファイアのような氷水を／飲んだ／悲しみに／押しつぶされそうだった／外に出た／浴衣姿で／団扇を持った人々が／祭りの広場へと急いでいた／遠くに 裸電球に照らされた櫓が見えた／藍色の帳の空に／太鼓の音が轟いていた／男に交じって力仕事をしていた母／薄化粧の顔が／とても綺麗に見えた／カキ氷を食べた／あの日

鮮やかに情景を紡ぎ出すその巧みな筆力で、読者を戻りたい世界に導いてくれる。そんな感想を抱きながら、現実を忘れるために飲む男の酒の辿り着く場所もそこなのかもしれない、と思った。女はどうか。「母は肘をつき／笑って僕を見ていた」、この時、母はそこに自身の戻りたい時を見ていたのかもしれない。そのように読者の心に思いが膨らむ。後藤光治の詩の力だ。

樋口武二詩集「残夢譚」(銀河書籍)を読む。「風景が記憶の中で揺れている」の後半部分を引く。

桜の木の下で、猫が黄色い箱をあげている。何やら如何わしい景色に思えてならないのだが、これもまた、いつもの幻視のはじまり、といってもいいものであるだろうかあるいは、夢のような午後に立たされていくというだけのことなのか、いや、午睡の夢というのが真相で、私はすでに土手の上で微睡んでいるとも考えられるのだ。此処にあるのは歪んだ私の日常であろう、と、そっと猫の背に触れば、夏の風に運ばれた季節はずれの花弁が、はらはらと対岸に向かって流れていった。やはりこれは、遠い日々の懐かしい記憶で、と思わず黄色い箱を開けてみれば、目くるめくような香りが周囲に溢れ出して、しだいに風景は濡れていくばかりだ。邯鄲のような昼下がりに、私はただ立眩むだけで、何も出来ないままで居る。猫は、さらに私にすり寄って来て、甘えたような声で足に絡まって来た。どうやら、馴染んだことのある景色にも感じられるのだが、さりとして、これといった証があるはずもない。全ては不確かな景色、思いつき、でもあり、まさに夢のような、妖しい時とも云つていい

秀逸な夢物語集である。長い人生を経て綴られた夢の世界は、生きることの不条理と現実の不思議な感覚に読者を導く。